

仄仄

高橋萌登

一 きいたもの

とおくから たどり着くものたち

かつての だれかの思い出
なくしもの

そつと 近づき
いつの間にか
引きずり込まれる

そして またどこかへ 流れつく

ここに さわやかさは ない

グレーに 近い
なんだか 物悲しい

だけど
だれかといると すこしだけ あたたかい
そんなところ

わたしは ぼんやりと ゆらいでいた

なにかを 探していたわけではない
待っていたわけでもない

なぜ ここにいるのか
と思ったところで どうしようも なかった

いつも ここにいたかのように
ただ ただ 漂っていた

*

音が 入った

いちばん やわらかいところから
静かに 冷たく 破らずに 入った

それが きく ということだった

返さず 応えず

そのかわりに
からだの内側が わずかに ひらいた

触れていた いくつかの境界が 折りたたまれ

しみこんで めぐり うつろって

わたしの中で ぐるぐると 一致していった

そして その先に
すすむもの

わたしは つづいた

ら

かたまり 見つけた

というより

そこに あった というほうが 近い

何色とも言えない ぬわり とした表面

時折 ふるりと ゆれていた

触れようとして やめた

なんとなく

今ではない と感じた

ただじつと みていた

みてみた

かたまりが

なにもしていなかったことだけが

はつきりと 伝わってきた

そのとき

顔のようなものが 上を向いた

目が合った
ような 気がした

すべて 気がするだけで
確かなことは 一つもなかった

でも

その瞬間

生まれた

それがなんだったのか
わからないまま

あとに

音だけが 残っていた

きいたことが あるような ないような

仄かな音

うすく ひびいて

すぐに 消えた

二 うずくまっていたもの

たどりついた
という感覚は なかった

ただ そこに あるものとして あった

思い出すことは
べつに なかった

けれど

「かつて」と 呼ばれるものの
ぬくもりが ちいさく 残っている

それは ふるえとして ときおり 表面をつたった

ふるり

と

ひとつ 波紋が うかんだ

なにかが 近づいていることに
すぐには 気づけなかった

においに まぎれて 気配は やわらかく あった

ふれられてはいない
けど

わたしの 輪郭が すこしだけ ゆるんだ

かおのようなものを そちらへ むけてみた

そこに 視線のような まなざしのような
向き が あった

目があった
と

あちらは 思った らしい

じじつとして あったのかどうかは わからない

でも

そのとき たしかに

うまれた

気づけば こちらが ふれていた

なんともいえない

ぬるい しみのよう

しみが ひろがったら

それはもう しみでは なくなるのだろうか

そんなことを ふと 考えた

三 みていたもの

みている

という行為は

触れるよりも 遠いはずだった

でも

ほんとうに そうだろうか？

みない

ということは できなかった

たとえ

目をそらしても

そこにあるものは なくならなかった

それは

風景ではなかったし

ただの記号でもなかった

いる でも

いない でもなく

気づけば ずっと みていた

あちらを こちらを そこにある すべてを

場の ひかりの厚みが
ばらばらと くずれた

それは 浸透して 届いた

遠くにいたはずの わたしが 近づいてしまった
ようだった

こちらが みていた
つもりのものたちが
こちらを みている

みられている

みられている

目をつむられない

背けられないことに

心地よさと同時に 恐ろしさを感じた

その なんとも言えない感覚のなかでも
ちゃんと わたしは 知っている

おわりがある ということ

四 渦になる

みていたものが 現れた

すでに そこに いたはずなのに
まるで 改めて きた かのよう

うずくまっていたものが みた
きいたものも みた

そのとき

みる

ただそれだけが
場を ゆがめた

誰が 誰を みているのか

境界が ぐねり

くるくると 回り出す

渦は じんわり 巻き込んでいく

みているものの みる が
こすれ もまれ 剥がれた

みている のではなく みさせられている？

自分が 自分のまま
べつのもの になっ

ざら

ざら

ざら

意味の手前の音

形にならない輪郭

それらが まとまり

音でも 記憶でも ない

ゆらぎ なっていった

深く 深く 螺旋の奥へ

うずくまっていたものが
いつのまにか

すー

消えていた

重なったものが
また わかれたようだった

五　こないもの

わたしは　いなかった

いない　というかたちで
ここに　いた

みえない　のではない
みよう　とされなかった

こえが　とどかない　のでもなかった
とどくばしよに
みみが　おかれていなかった

におい
にじみ
かすかな
まえぶれ

もし　だれかが　まっていた
というのなら

わたしは　それに　ちかいものだった　とおもう

いない　ということと
いる　ということが

おなじ　かさなりかた　をしていた

それは

ひとつだけ　ばのこきゅうを　くるわせ
ひとつだけ　ひかりのむきを　ひきずった

それでも
わたしは　まだ　こない

それが
このばにとつては
いちばん　つよい　ありかただった

六 音として

声では ない
ことば でも ない

ただ ここに 浮かぶ ひびき

かれらが そこに いる ことと
ここに いる 自分

たがいに 近づいては 離れ
混ざらず

ただ ある

音と音の あいだには
細く はりめぐった 感覚の 膜がある

それは 軽い 圧となって 跳ね返す

そして 一拍の 間となり
あたらしい 呼吸を うむ

わたしは 今日
ここで 鳴りつづける

かれらと ともに

いまは ただ そうしている

七 のこされたわけではなく

いつのまにか 渦は 消えていた

なにがあつたのか

それは すでに どこにも なかった

たしかにあつた 気がした

けれど 思い出そうとすると

それは はじめから なかったことになっていた

きいたものと みていたものは

変わることなく

おなじ方へ 流れていく

望んだわけでは ない

一歩 すすめば また次が 訪れる

いま は

すこし前と ちがうようで

おなじようでもあり

ふたりは

そういう時間を

これからも 積み重ねていく

八 寄る

そこは 空気が 澄んでいた

すでに こないものは いた

場の内側で そつと たゆたっていた

うずくまっていたものが 顔をあげた

みていたのか

まっていたのか

こないものが 近づいた

一粒 ぽたつと 落ちて

波紋が まあるく ふくらみ

するりと 進んでいく

ならばあう ふたつの存在

うずくまっていたものの なかに

色のない 濃さが うまれた

それは きつと

むかしから知っていた 濃度

すーすーすーすー

九 裂け目より

静けさの層のなかで

ふたつが よりあい

やわらかさが 保たれていた

すみの方から ずれながら

こちらへ やってくる もの

足音はなかったのに

空気が かすかに たわんだ

みていたもの＋

あるいは

なにか 別の角度から きてしまった
それ

は

こないものが みえなかった

そのみえなさが

あまりにも 確かで

あまりにも 淋しくなかったので

場は また 割れて いった

*

「おかしいなあ……」

そのとき 音は

もう 音で とどまらなかった

声をもった ダレか

ちがう

と 思う前に

すでに いた

「おいっ！」

ひとつめ

ふたつめ

みつつめ

ガン ガシヤ ポンギ

よつつめ

乾いた拍が

うしろ でも

となり でもなく

天井の さらに 奥から

たれてくる

問うより先に

からだか 応答していた

「ねえ、これ……」

こわくないのに、こわいよね？」

ププププププププププププププププププププププププ
ププププププププププププププププププププププププ
ププププププププププププププププププププププププ
ププププププププププププププププププププププププ

耳の手前 耳のおく 骨の裏 皮膚のなか
じぶんでないところまで すべりこんでいく

言葉のような 泡立つ 呼び声のような
だれかが 撫でた 痕跡のような な な な

声が ふたりを 飲み込んだ

ガラツ カシヤリ ポーン

ギイ ガチャ ピチ

ハア

そこへ ぬるりと きいたもの

を

なぞるようにして ついてきた

すすむもの

すすむものは 歩みを やめた

きいたものは それが なくしたものだ
ふいに 思い出した

すすむものは
きいたものの 一部になった

きいたものは
かつてのきいたもの になった

そして

うしろを ふむ
影が ふえる

重さは なくて
空気が はずむ

ふたりと ひとつ

あわせて みつつ

それでも けっして

ひとつに ならず

「ねえ、これ……」

こわくないのに、こわいよね？」

ざわりが 走る

こわい って なに？

こわいの に こわくないって なに？

カシヤリ

ガラツ

ギイ……

ばきり ひびが渡り
すじができて
裂け目が 増殖する

下のほうから

ぐにゅつと せりあがり

くずれぬままに 溶けていく

音が 声に

声が 気配に

気配が 灰めきに

「これね これね

まえから

いたの

いたけど いない

いないけど

いたの

そういうことって

あるでしょ

あんの」

十 底に落ちて

沈んでいく

というより

上も下も 意味をなくした 感覚だった

さっきまでのことは

まったく どうでもよくなっていた

じぶんのなか

ふつふつ としている

音は にごり とじていた

両手で 耳を塞がれているような

ちがうちがう

そんな感じじゃなくて

ほんとうは

どれくらい そうしていたのか
ふと 気づく

ここには ひとりだけでは なかった

すでに 一部が ふれていた

あたたかいとも つめたいとも

言いきれない 温度の端

愛おしいような

そうだ わたしは 知っている

ありえなかった

記憶が

この先が

たえまなく 内臓の深いところで うごいた

なにかを やめた

なにかを つづけた

なにかを 伝えなかった

時が 急速に 層を変えていく

それでも それは 常に そばにあった
そうでなければいけなかったし
どうなろうと 仕方ないと思った

音の波は 広がり 屈折して 回折した

わたしは 混ざったり 混ざらなかったり

わすれものはない

しばらく ここに

身を あずけることにした

十一 だいたい いっしょ

なんか ちよつとだけ
ひかりの向きが 変わった

あれ? って

でも気のせいかな って思ったまま
その空気が ずっと続いていて

すぐそばに いたのは
かつて うずくまっていたやつ

うずくまっていたのに
いまは 違う

しっかりと そこに いる

かつて きいていたやつは
もうきいている とも

きいていない とも言えない

音のほうに 先に 中に入ってきて
ぐぐぐ ってなって

でもそれ もしかして
隣のやつの 骨のなか だったりして
いや わたしの中かも
どうだろ

ああ おなかすいたな……

ふと

え わたし 今 どれなんだ?

って思ったけど

その問いは すぐ ひろがって
ひろがりながら 飛んでいく

『べつに そんなの わからなくても いいよね』

そう どこからかきこえた

皮膚の裏が ざわりとする

だれかが近づいているときに たまにあるやつ
もう 六とおり越して 七とか八の域かも

わけわかんないな って思いつつ
だんだんと おなじになっていく

どこかの 縁が ほどけて

気配が まばらに たちのぼる

それは たぶん なにかが くる じゃなく
なにかが いた ということの 可聴

わたしたちは それを きっと 待っていた

十二 歩協和音

[illegible]

十三 ひとときのうた

あしおと ひとつ かさねても
 ふりむくものが いないから
 それは うたに なるんです
 ズ カカ ズ トン カカ

いっぽん ふみだす あしのうら
 ふたつめ どこかに ぬけていく
 みつつめ ぬけたら うしろから
 しずかに ついてく ものがいる

わたしは なにも もってない
 なにも もって こなかった
 もってないから あげられる
 あなたが なくした ときのこと

ズ カカ ズ トン カカ

ひとつぶんの まぼろしは
 ふたつぶんの ぬくもりで
 できている できている

ズ カカ ズ トン カカ
 ズ カカ ズ トン

そとでは いまも おとがする
 なかでは なにも かわらない
 かわらないまま ふれている
 ふれたら すぐに わすれてね

だけでも
 わすれたことを おぼえてて
 おぼえていたら もう いいの
 もう いいの もう いいの

トン ズズ カ トンカ

うたが きえたら なにもものも
 のこらないけど あるように
 あるように ないように

ズン トン トン

まだ ここに いるの いないの
 まだ ここに いるの いないの

アーシユト ヒチイ クーミソリ
 フリムンチンガ イネイラガ
 ナトラーサー ウタ ナユンヤウ
 ズ カカ ズ トン カカ

イツピン フミテイチャ アシヌシラ
 タチチメ カニンド ヌキラツサ
 ミチチメ ヌキラバ ウシーカラ
 シクワヌ チュインガ モルダンウ

ワンヤー ナンムン モチネアン
 ナンムン モツチイ チャナカツタン
 モツチイネーカラ アシユルン
 アマハヌ ナスリタ トウキヌクトウ
 ズ カカ ズ トン カカ

ヒチトウブンヤー マブーシハ
 タチトウブンヤー ヌクミルモ
 ナテイイチュン ナテイイチュン

ズ カカ ズ トン カカ
 ズ カカ ズ トン

ソートウ ナーフエン オトウガス
 ナーフエン ナンム カワリーン
 カワリーマンマ フリテイーチュ
 フリテイー サクミ ワスリテイネー

サガンドウ
 ワスリチャルクトウ オボケテイネー
 オボケテイレーバ ソア イイノー
 ソア イイノー ソア イイノー

トン ズズ カ トンカ

ウターヤ キイラバ ナンムンナ
 ナクナイシリガ アルグトウヤ
 アルグトウヤ ナイグトウヤ

ズン トン トン

ラダ ククル イルヤ ネーヤ
 ラダ ククル イルヤ ネーヤ

十四 さ青なる君へ

だんだんと
光りはじめていた

ありがとう
ごめんね
またね
それとも さようなら

*

というありきたりな
けどそれでしかない言葉が
ぼろぼろと 溢れた

あれは ここに いた
たしかに いた
いまは もう いない

呼んだのか 来てくれたのか 触れたのか
たまたま 交わっただけなのか
わからないけれど

共にした あの時間

が
そこにあったことだけは
本当
だと思いたい

共にしたものだけが
知っていること

感じようとしなければ
見ようとしなければ
聞こうとしなければ

それは ないもの

しーん

そっと そっと
すべてが しずまったあと

淡く 淡く
仄めきが満ちていく

そして また どこかに 流れつく

誰かと いると
すこしだけ あたたかい
そんなところへ

完

あとがき

色々と経緯も伝えたいと思い、一丁前にあとがきを残したいと思います。

始まりは、Dance Base Yokohamaの唐津さんから新しく始まるプロジェクトへのお誘いをいただき、新作を作ることになったことでした。どんな作品を作ろうかと考えていたときに、怪談×HIPHOPのような方向性がおもしろいのではないかと思います。

もともとホラーや怪談が好きで、よく読んだり観たりしていたのですが、それを自分の表現に活かすのは難しく、これまでは娯楽として楽しむばかりでした。私は特にホラー作品の背景を知ることが好きで、なぜ化けて出るのか、呪いや恨みの根源は何か。そうした背景を知ると、不思議と怖くなくなるんです。むしろ同情したりお化け側の味方になったり、愛着すら湧いてくる。そして、どの話にも根源は必ずあり、結局、生きている人間のほうがよほど怖くて残酷だ、という結論に至ります。そうした、ただ単に恐怖を感じるのではなく、切なさや哀愁、愛を感じられるところが魅力だと私は思っています。ホラー作品が苦手な人はたくさんいますが、一歩進んで知ることで見え方が変わると思います。

前置きが長くなりましたが、私はそういった良さと、怪談の静けさや儚さを作品にしたいと考えました。最初は原作や原案となる作品を探しました。小泉八雲や、怪談とは少し違いますが小川未明の作品に影響を受けました。改めて怪談をよく読んでみると、男女の愛憎を題材にしたものが多く、そうでないものを求めて幅広く読み漁りましたが、どうしてもピンとくるものが見つからず、難航しました。オリジナルという選択肢もうっすら頭にはあったものの、きつと何か見つかるはずだという期待が捨てきれずにいた頃、昨年からお世話になっている伊藤千枝子さんと話す中で、「オリジナルで書いてみたら？」と背中を押され、ついに腹をくくることに。

とはいえ、演劇っぽいなんちゃって台本は書いたことがあっても、物語を書くのは初めてのこと。最初の方向性から悩みました。表現したい雰囲気や感覚は明確にあるのに、それを文章に落とし込むのがとても難しい。セリフや登場人物の数、配役の制約が多すぎると、今度はダンスに落とし込みづらくなってしまふ。書いては消し、を何度も繰り返し返しました。

最初の走り出しのきっかけは風鈴の音でした。風鈴や鐘の音がスーッと空間に伸びていくような感覚。現世とあの世を結ぶようなイメージが浮かびました。次に灰色の海。冷たくて物悲しい、荒々しいけど静かな情景。それらを文章にしてもしっくりこなかったので、今のような詩的で抽象的なスタイルに落ち着きました。

ちなみに最初にHIPHOPと書きましたが、最終的にはそこに固執せずに作ろうと思いました。ただ、怪談とHIPHOPには、間やリズム感など共通点があり、相性のよさは感じています。

私の中ではわかっていることも、文章を読んだだけでは伝わらない部分も多いかもしれません。でも、読んでくださった方がそれぞれに想像を巡らせてもらえたら嬉しいです。小さなこだわりも色々散りばめています。そしてこの物語と、実際に上演されるダンス作品とを合わせてご覧いただいたときにどう伝わるのか、私自身とても楽しみです。先に読むか、あとで読むかでも、きつと受け取り方が変わるでしょう。

長くなりましたが、この機会がなければこの物語は生まれませんでした。きっかけをくださった唐津さんに、心から感謝します。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。